

第Ⅳ章 考察竪穴住居の廃絶について

はじめに

林田遺跡のⅠ区(1999年度調査)、Ⅲ区(2000年度調査)において弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居址を11棟検出した。これらの竪穴住居址の中でⅠ区のST2やST6、Ⅲ区のST4からは多量の土器や河原石の集中が認められた。既に報告書や本文で触れたように、これらは出土状況から判断して竪穴住居の廃絶に伴う意図的な行為であると見られる⁽¹⁾。筆者は小籠遺跡の報告においても竪穴住居の廃絶に伴い意図的な埋め戻しの行われていることを指摘した⁽²⁾。他の遺跡においても弥生時代後期から古墳時代前期に同様な事例が多く報告されるようになった。

竪穴住居の廃絶については、遺物の出土状況からさまざまなパターンに分類することができるが、ここでは大量の土器や河原石が集中出土する事例を紹介し、それらの意味について考えて見たい。

青木一男氏は、長野市松原遺跡の分析から竪穴住居の廃絶段階に意図的な遺物廃棄の行われたことを指摘し、遺物の出土状況の分析から竪穴住居の機能停止段階に「埋め戻し行為」、「火入れ行為」、「土器の廃棄あるいは遺棄行為」のあることを復元している。その上で大量の土器については、集落構成員による共飲共食儀礼の結果であるとの興味深い見解を示している⁽³⁾。また山本哲也氏も東崎遺跡の報告書の中で、竪穴住居の廃絶について触れられ「集落内の共同祭儀」として建物の解体等が行われてた可能性を指摘している⁽⁴⁾。

1 竪穴住居の廃絶事例

廃絶竪穴住居から大量の土器や河原石が集中して出土する場合、その出土状況から大きく次の3型態に分けることができる。Ⅰ型態：床面から大量の土器が出土する。Ⅱ型態：床面から浮いた状態で大量の土器が出土する。Ⅲ型態：大量の河原石と共に土器が出土する。河原石や土器は多くの場合床面から浮いており、河原石が幾つかの群に別れるⅢA型態と群に別れないⅢB型態とに分けることができる。Ⅲ型態の土器の出土状況は、Ⅰ・Ⅱ型態に較べると密集度においてやや粗となる傾向にある。以下、具体的な事例について紹介したい。

(1) 小籠遺跡 (Fig.22)⁽⁵⁾

高知平野の中央部に位置する。弥生時代後期から古墳前期を中心とする集落遺跡で22棟の竪穴住居址が検出されている。これらの中でⅠ型態とⅢB型態が1例ずつ検出されている。Ⅰ型態のST17は、一辺が6m前後を測る隅丸方形の住居址で弥生時代後期末(Ⅵ-1期)に属する。床面から10個体以上の甕を中心に、壺4個体前後、鉢7～8個体、高坏、砥石、石包丁が出土している。図示したようにこれらの出土状況はA、B、Cの3ブロックに分けることができ、接合関係も各ブロック内において完結する傾向にある。しかもAブロックからはほぼ完形復元可能な壺、甕、鉢が各1点、Bブロックからは甕が5個体以上集中、Cブロックにおいては大型鉢が2個体出土するなど器種に偏りが見られる。このような出土状況は、報告者も述べているように「土器の廃棄に対して一定の意図」が働いていることは明瞭であろう。床面出土の土器が3群から構成されていることは、廃絶に際し

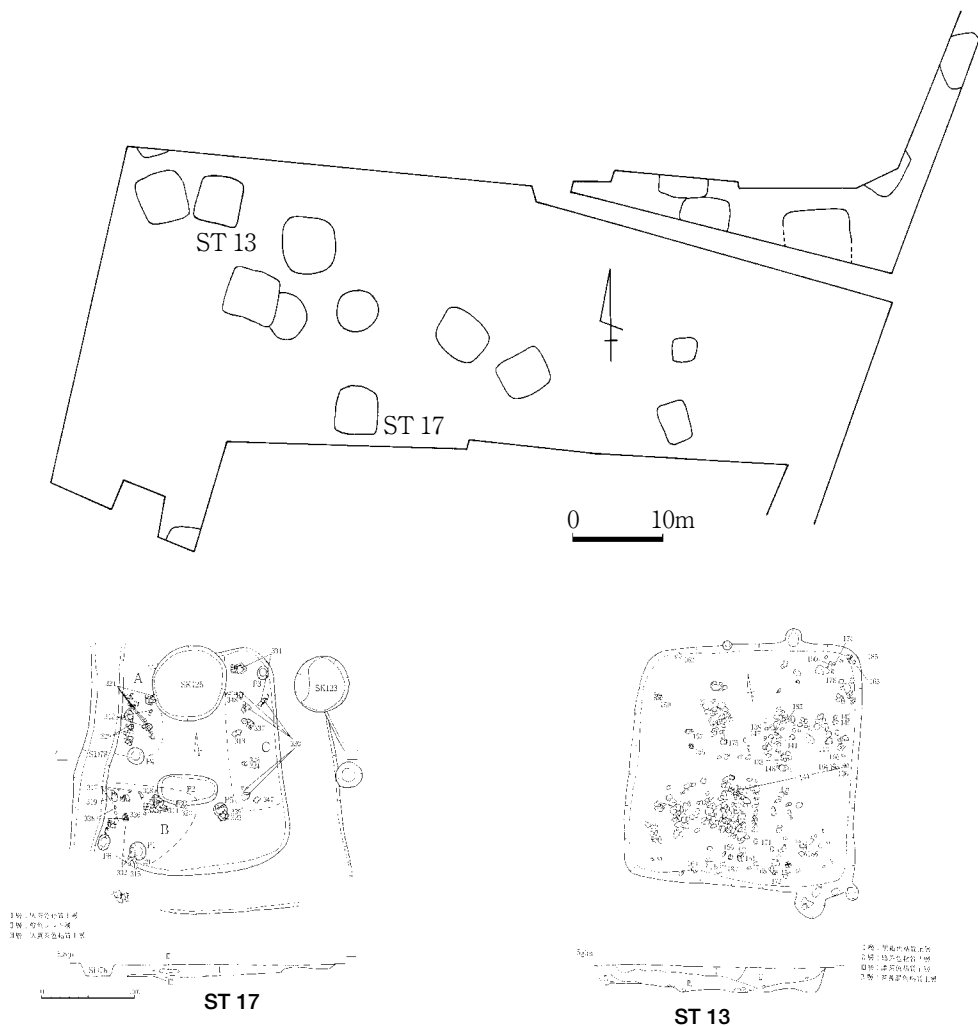


Fig.22 小籠遺跡竪穴住居址分布図及びST17・13平面、セクション図

て一定の秩序、或いは単位の存在を示唆している。また甕はすべて煤けている。

ⅢB型態はST13が該当する。ST13は一辺5m前後の方形プラン呈し南に開口するコ字状のベッド状遺構が存在する。古墳時代初頭に属する。ここからは、床面および埋土Ⅲ層中から大量の河原石と一緒に土器が出土している。河原石の大きさは拳大から人頭大のもので、河原石は当遺跡の基盤となっている低位段丘(長岡台地)礫層中にある円礫である。土器は口縁部の点数で見ると壺25点、甕61点、鉢88点、高坏30点、支脚10点を数える。個体数に換算すれば甕は10個体前後、鉢は20個体前後、高坏も10個体前後を数え、甕の大半は煤けている。完形を保った土器は床面と南側壁際に集中する傾向にあり、特に後者からは鉢4個体が完形品で出土している。意図的な埋置、埋め戻しの結果である。

(2) 東崎遺跡 (Fig.23)⁽⁶⁾

小籠遺跡から東に2kmの地点に営まれた弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする集落址である。14棟の竪穴住居址が検出されており、ⅢA型態が1例(ST6)、ⅢB型態が3例(ST1・5・7)見られる。ⅢA型態のST6は、6.2×5.6~6.0mの方形プランを呈し、弥生後期末期(VI-1期)に属す

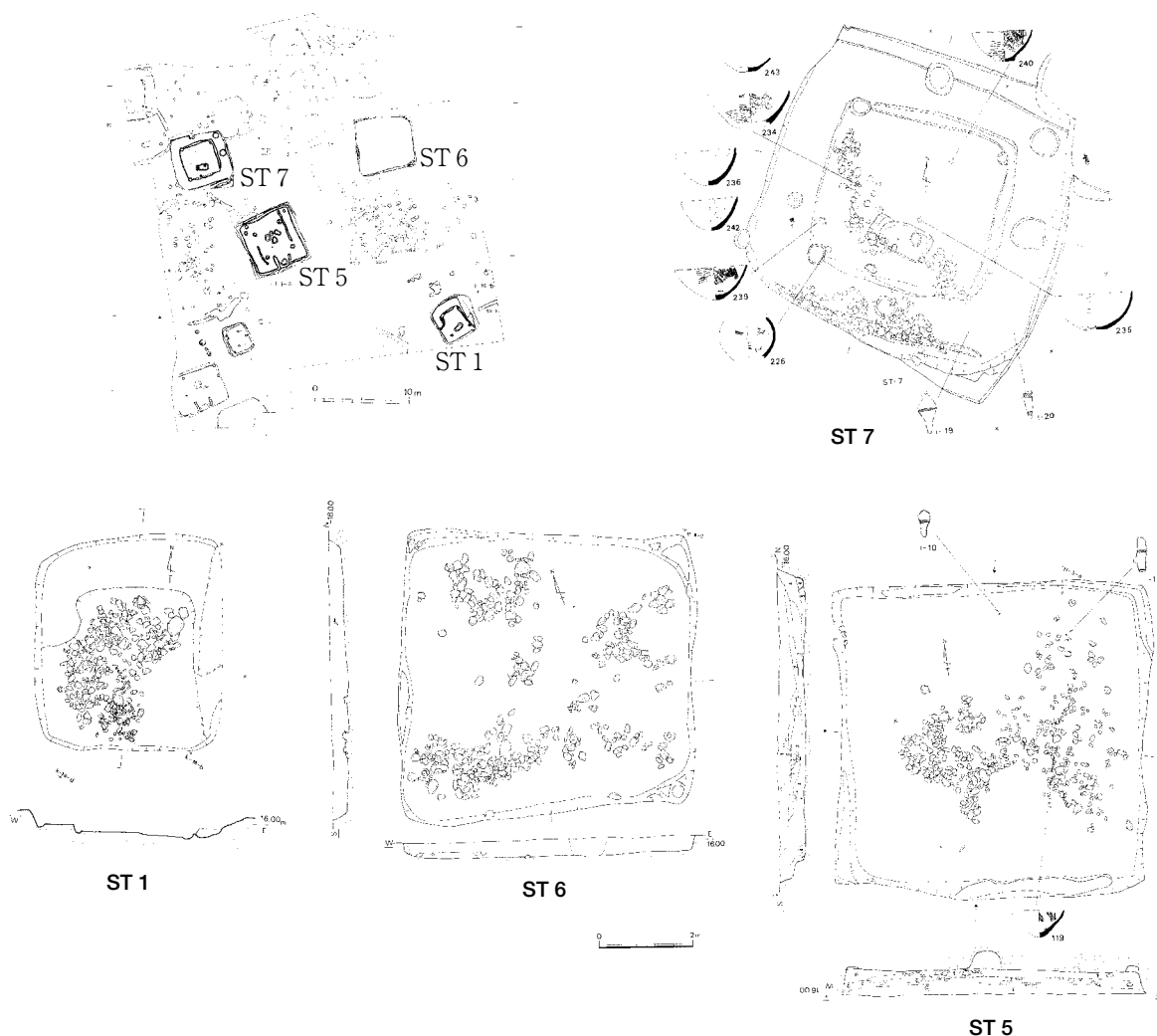


Fig.23 東崎遺跡竪穴住居址分布図及びST1・5～7平面、セクション図

る。床面から6～18cm浮いた状態で円礫が多量に出土しているが、集石は西南、西北、北東部の3群に大きく分かれる傾向にある。西南コーナー部の集石が最も大きく、ついで西北部のものが大きい。円礫の中には被熱赤変しているものも見られる。集石間及び床面から20個体以上の甕を中心に鉢、壺、高坏、支脚、土玉が出土し、この他鉄鏃片を含む5点の鉄器片も出土している。なおST6は床面に中央ピット、柱穴などの遺構が認められない。住居址として機能した遺構であるかどうか問題が残るが、集石や土器等の遺物出土状況は廃絶住居と同様のあり方を示している。

ST1は4.1×4.5mを測るやや小振りの方形竪穴住居で、北側と東側にベッド状遺構を有する。古墳時代前期初頭に属する。住居址中央部に2.2×3.2mの範囲内で多量の円礫の集石が見られる。集石は床面より浮いており中には被熱赤変したものもある。集石間より甕を中心とする多量の土器と共に2点の鉄鏃が出土している。報告者は「集石+土器類+鉄器を用いた廃棄行為が復元」されたとし「住居跡廃絶に伴う埋没祭祀が考えられる」としている。

ST5は6.7×6.5mの方形住居で、古墳時代前期初頭に属する。住居址の中央部に多量の円礫の集

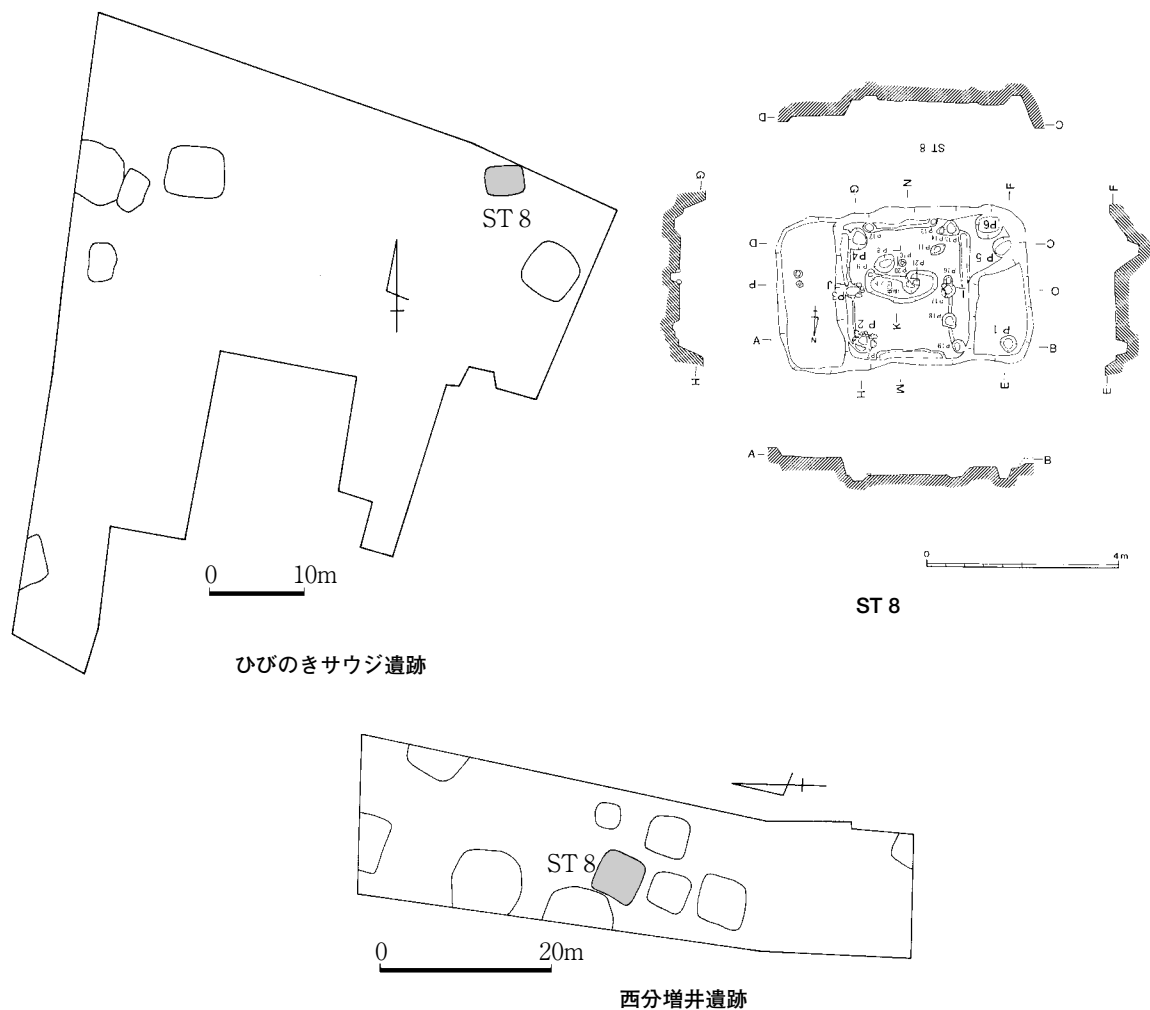


Fig.24 ひびのきサウジ遺跡竪穴住居分布図・ST8平面図及び西分増井遺跡竪穴住居分布図

石と集石間から甕9個体、鉢10個体、高坏8個体、壺、支脚などと共に鉄鏃とヤリガンナが1点ずつ出土している。集石には被熱赤変したものも認められる。この他床面からも鉢を主体に甕、高坏、壺などが見られ、鉄器も手鎌、鋤先、鉄鏃が出土していることから、床面と床面から浮いている集石との2段階の行為が復元されよう。

ST7は、一辺6.4mの方形プランの住居址でベッド状遺構が全周する。弥生後期終末期(VI-2期)に属する。ここからは、南壁側のベッド状遺構と低床部から帯状の集石が検出されている。後者の集石中からは鉢4個体が出土しており、他の地点からも甕と鉢を中心に30個体近くの土器と鉄鏃2点が出土している。以上4つの住居址から出土した円礫は、小籠遺跡例と同様に基盤層のものである。当遺跡における集石や多量の遺物出土について、報告者である山本哲也氏は「住居跡廃絶にあたって土器の使用(煮沸行為による共同飲食もしくは供献)と破碎・鉄器の供献を伴う祭祀儀礼が行われた可能性が指摘される。」とし、「集落の共同作業としての解体等が行われ、祭祀儀式も集落内の共同祭儀であった可能性が高い。」ことを指摘している。

(3) ひびのきサウジ遺跡 (Fig.24) ⁽⁷⁾

香美郡土佐山田町百石に所在し、物部川右岸の低位段丘上に立地する。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の竪穴住居址7棟と壺棺墓9基などが検出されている。近接するひびのき遺跡においても同時期の竪穴住居址が6棟検出されており、高知平野北部における中心的な集落を形成していたものと考えられる。ここからは竪穴住居ST8からⅠ型態が1例見られた。ST8は、5.3×3.2mの長方形プランを呈する小型住居で東西壁にベッド状遺構を持っている。時期は後期末(Ⅵ-1期)に属する。床面を中心に甕30個体以上、鉢20個体以上、壺10個体前後、高坏10個体以上、鉄鎌1点、砥石3点、土錘1点が出土している。大量の土器について報告者は「出土した土器は、投げ込まれたのではなく据え置かれたと考えられる」とし、祭祀的性格を指摘している。土器は完形品または完形復元できるものが多く、甕の大半は外面が煤けている。甕の1点は搬入品の下川津B類土器も見られる。

(4) 金地遺跡 (Fig.25) ⁽⁸⁾

南国市金地に所在する。弥生時代後期終末(Ⅵ-2期)の住居址2棟(ST1・2)が検出されており、ともにⅢB型態に属する。ST1は一辺5.3mの隅丸方形プランをなし4面にベッド状遺構が巡っている。高床部から床面中央部に向かって多量の円礫が検出された。集石と混在して甕20個体以上、鉢20個体以上、壺、支脚、手捏土器が出土している。甕はほとんど例外なく煤けている。同時期のST2も同様な状況を示している。

(5) 西分増井遺跡 (Fig.24) ⁽⁹⁾

高知平野西部の吾川郡春野町西分に所在する。縄文時代後期から古代にかけての複合遺跡で仁淀川下流域の拠点集落として位置付けられている。中心は弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にあり、当該期の竪穴住居址10棟が検出されている。その内の1棟ST8にⅠ型態が認められる。ST8は一辺5.3mの方形プランを呈し古墳時代前期初頭に属する。床面中央部から北西コーナー部に向かってコンテナ26箱分の大量の遺物が集中出土した。甕と鉢は20個体以上、高坏10個体以上、ミニチュア土器4点、壺などが出土している。吉備、河内、阿波からの搬入土器も複数個体見られる。

(6) 林田遺跡 (Fig.25) ⁽¹⁰⁾

香美郡土佐山田町林田に所在し物部川左岸の低位段丘上に立地する。林田遺跡は地点を異にしてこれまで3回の調査が実施されており、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の竪穴住居16棟が検出されている。1999年調査区(Ⅰ区)でⅡ型態が1例(ST2)、ⅢB型態が1例(ST6)、2000年調査区(Ⅲ区)においてⅢB型態が1例(ST4)見られた。Ⅲ区のST4については本文中で述べた通りである。Ⅱ型態を示すⅠ区ST2は、直径5.6mの比較的小型の円形住居址で弥生後期末(Ⅵ-1期)に属する。住居址中央部から南部にかけてと東よりの部分の2群に分かれて大量の土器が集中出土している。これらの土器は、床面からの出土はなく20cmほど浮いたところに集中している。甕が圧倒的に多く、次いで鉢、壺、高坏で、ミニチュア、鉄鎌も1点出土している。甕のなかで煤けているものは2割程度である。これらの土器は、住居址が床面から20cm程埋め戻された後に廃棄されたもので

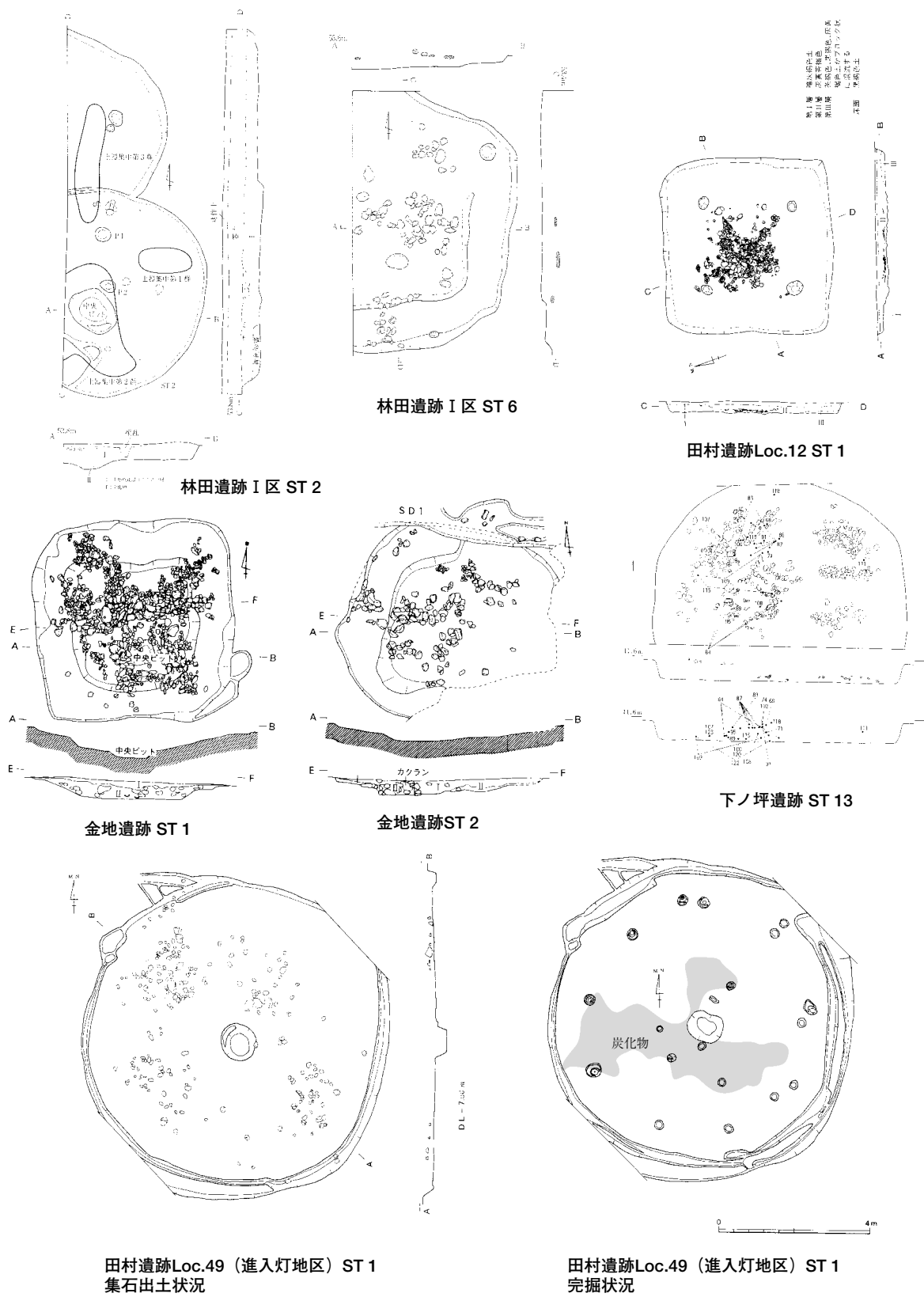


Fig.25 林田遺跡・田村遺跡・金地遺跡・下ノ坪遺跡の竪穴住居平面図

ある。

ⅢB型態のST 6 は、一辺が4.4m前後、径7.4m程の五角形ないしは六角形の平面形を呈し、南壁側にベッド状遺構を持つ。古墳時代前期初頭に属する。住居址の中央部を中心に床面から10cm程浮いた状態で多量の円礫が出土している。土器は特に集中する傾向は認められないが、埋土中から甕と鉢が10個体ほど、壺と高坏が数点出土している。

(7) 田村遺跡 (Fig.25)

南国市田村に所在する。弥生時代においては、前期～後期の竪穴住居址430棟が検出されており、西日本屈指の拠点集落として位置付けられる。Ⅰ型態とⅢA型態が一例ずつ見られた。Ⅰ型態はLoc.12のST 1 が該当する。ST 2 は4×4.2mの方形住居で後期末(VI-2期)に属する。床面中央部に40～50cmの焼土の広がりがあり、焼土を中心として4本の柱穴に囲まれた範囲の中から多量の土器と炭化材が重なるように出土し、炭化材の中には板状のものもあり土器の上に被さるような状況を呈するものもある。甕30個体以上、鉢10個体以上が出土しており壺は少ない。また本例には中央ピットが存在しない。⁽¹¹⁾

ⅢA型態は進入灯部分(Loc.49)のST 1 が該当する。ST 1 は、直径8.4mの円形住居址で後期中葉(V-3期)に属する。床面から浮いた状態で大小300個以上の円礫が、4ブロック程に分かれて出土している。土器の出土は少なく集中傾向も見られない。床面には炭化物・焼土塊の広がりが認められる。⁽¹²⁾

(8) 下ノ坪遺跡 (Fig.25) ⁽¹³⁾

香美郡野市町下ノ坪に所在する。物部川下流域の左岸の沖積低地に立地し、弥生後期前葉と古代に盛行期がある。弥生後期前・中葉の竪穴住居址12棟が確認されているが、遺跡の広がりから見て50棟以上を擁する集落址で、右岸に展開する田村遺跡の衛星的集落の一つとして位置付けることができよう。ここからはST13からⅢA型態が検出されている。ST13は直径7mを測る円形住居址で後期前葉に属する。集石は4つの群に分けることができる。西半分は3×3.6mの河原石の大きなまとまりがあり、東半分には3つの小群がある。これらの集石は床面から浮いており、住居の埋め戻しの過程で置かれたものである。床面出土の遺物は石包丁2点と壺底部1点のみで、多くは西側の集石間から出土している。集石と同時に置き去られたものであろう。

2 廃絶型態の検討

以上、竪穴住居廃絶に伴う円礫や土器等の集中出土について、本文中も含めて8遺跡16棟の事例を紹介した。これらの事例は、全て竪穴住居の機能停止後、屋根や柱などの建築機材を解体除去した後に実施された意識的な行為であると考えられる。廃絶パターンの型態別内訳は、Ⅰ型態が4例、Ⅱ型態が1例、ⅢA型態が3例、ⅢB型態が8例である。以下、冒頭に紹介した青木氏の分析との比較も行いながら各型態の検討やこれらの住居址の位置付けについて考えてみたい。

Ⅰ型態とⅡ型態はともに多量の土器を用いた廃絶型態であるが、廃絶行為の過程に大きな違いがある。すでに述べたようにⅠ型態は床面に多くの土器を埋置した後に埋め戻している。小籠遺跡ST17やひびのきサウジ遺跡ST 8、田村遺跡Loc.12のST 1、西分増井遺跡ST 8 が該当し、出土状

況について「据え置かれた」という表現にも示されるように土器の遺存状況が極めて良好であることが特徴である。「土器埋置型態」と呼称しておきたい。一方、Ⅱ型態は竪穴住居址を一定の深さまで埋め戻した後に大量の土器を廃棄している。土器の遺存状態はⅠ型態ほどに良好でなく接合復元できる資料も少ない。「土器投棄型態」とする。両者の違いは出土状況だけでなく、使用法にも現われている。すなわちⅠ型態は甕のほとんどが煤けているのに対して、Ⅱ型態ではそれほど顕著ではない。廃絶の内容・目的に根差した差違として解釈することも可能であろう。

Ⅲ型態については集石の意味を追究しなければ成らないが現段階においては有効なアプローチの方法を見出し得ない。ただⅢA型態とⅢB型態とでは時期的な違いを指摘することは可能である。すなわちⅢB型態が全て弥生後期末(Ⅵ-2期)と古墳時代初頭であるのに対して、ⅢA型態は、下ノ坪遺跡ST13が後期前葉、田村遺跡Loc.49のST1が後期中葉、東崎遺跡のST6が後期末(Ⅵ-1期)に属しており全て古相を示している。ⅢA型態→ⅢB型態の変遷が想定される。「集石A型態」、「集石B型態」とする。なおこの型態は、床面で行われる場合が少ないことからⅡ型態との共通点を持っている。

今回紹介した16事例は、使われている土器の多さや鉄器等も伴うことから青木氏のパターンD類、すなわち「複数の構成員による共飲共食儀礼行為の結果」に近いと思われる。しかしパターンD類は「火焚き」を伴うことが重要な要件となっており、高知平野の諸例とは異なる。東崎遺跡の集石の一部に被熱したものが含まれており、田村遺跡Loc.12のST1には炭化材も土器と共に出土しているが、現状ではこれらは例外的である。現状においては、廃絶住居の中で「火焚き」が行われたことを積極的に証明する痕跡は認められない。次にこれらの廃絶住居址の各集落における位置付けについて少し触れておきたい。各廃絶型態は、特別に大きな面積や特別の施設を持つ竪穴住居ではなく、極一般的な住居において行われているおり、僅かに田村遺跡Loc.49のST1が大型住居に属するのみである。パターンD類が集落の中で最も大きな住居やそれに準ずる大型住居で行われるのとは異なるところである。

3 まとめ

高知平野の弥生後期末から古墳時代初頭に顕在化する大量の土器と集石による竪穴住居廃絶の型態を「土器埋置型態」、「土器投棄型態」、「集石A型態」、「集石B型態」として捉えた。各型態はその性格や目的、背景を異にするものと思われるが、その具体像について迫ることは現状では難しい。しかしすでに先学の指摘のように、これらに使われた甕や鉢を中心とする大量の土器は、複数の竪穴住居から構成される共同体員の行為としてなされたことを物語っていよう。そして同時に祭祀的、儀礼的な側面を有していたことも十分考えられることである。「埋置型態」顕著な甕の煤けは共飲共食儀礼の後の埋納的行為である可能性は十分考えられる。

このような竪穴住居の廃絶行為が、現状では弥生時代後期中葉から散見されはじめ、後期末から古墳時代初頭に盛行期を迎える。高知平野において拠点集落であった田村遺跡が劇的な解体を遂げ、集落の再編が進行する時期に生じた現象であるだけに興味深いものがある。

註)

- 1)出原恵三「第Ⅳ章まとめ」『林田遺跡Ⅰ』(財高知県文化財団埋蔵文化財センター2002年
- 2)出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡Ⅱ』(財高知県文化財団埋蔵文化財センター1996年
- 3)青木一男「箱清水期における土器廃棄のⅠ様相」『長野県埋蔵文化財センター紀要7』長野県埋蔵文化財センター1999年
- 4)山本哲也『東崎遺跡Ⅰ』(財高知県文化財団1991年
- 5)註2)に同じ
- 6)註4)に同じ
- 7)高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』高知県土佐山田町教育委員会1990年
- 8)吉原達成『金地遺跡』南国市教育委員会1992年
- 9)出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』高知県春野町教育委員会1990年
- 10)出原恵三・小嶋博満『林田遺跡Ⅰ』高知県土佐山田町教育委員会2002年
- 11)下村公彦・島崎富規「loc.12」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書田村遺跡群』第2分冊高知県教育委員会1986年
- 12)出原恵三『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(山側進入灯設置区域)報告書ー田村遺跡群ー田中地区』高知県教育委員会1986年
- 13)小松大洋・出原恵三・池澤俊幸『下ノ坪遺跡Ⅱ』高知県野市町教育委員会1998年